巻頭のことば

学びと集いの場　共同研究室

文学部教授 **杉崎 泰一郎**（すぎざき たいいちろう）

Profile

1959年東京都生まれ

最終学歴　上智大学大学院博士後期課程修了、博士（史学）

専門分野　西洋中世史（教会史、フランス史）

趣味　劇場通い（自粛中）、食べ歩き（我慢中）、FMラジオ（流しっ放し）

中央大学文学部に招かれて、早いもので20年余りが過ぎました。私は中大の出身ではないので、共同研究室とその役割については、着任後に知りました。学んだ大学や前任校にも専攻の事務室があって、職員さんが在室していたのですが、中大文学部には各専攻に共同研究室があり、教育や研究の要（かなめ）となっていることに、着任後まず気づきました。スタッフとして最初に共同研究室の書庫に入ったとき、さまざまな言葉で書かれた多くの書籍が整然と並んでいるのを見て、知の営みを育む森にいるように感じました。私は西洋中世の教会史が専門で、奇跡物語や聖人伝を史料として使うのは前任の先生とも重っているためか、研究に必要な史料や学生の指導に使う書籍がたくさん入っていたのでとても助かりました。デジタル化が進んだ時代になっても、本が居並ぶ書庫で紙の書籍を手に取って、重みを忘れてページを送るのは、至福のときといっても過言ではありません。

共同研究室の役割はそれだけではありません。学部の新入生から博士課程後期課程の院生まで、そこは多くの学生が集う交流の場です。学生たちは知の迷宮である書庫を共有するだけでなく、いつもですと互いにアドバイスを交わしたり、授業の準備をしたり、よもやま話をしたり、卒論や就活について情報を交換します。そして二人の室員さんが、事務的な作業にとどまらず、学生たちの会話に入っているのは微笑ましく頼もしい光景です。そこではインターネットだけでは得難い、温かい会話が営まれます。併設する演習室（上写真）は、ゼミ教室として使用される時間以外は、読書や個別相談の場にもなっています。

このところのコロナ禍によって、キャンパスから学生の姿と声が消えてしまったのは寂しい限りです。しかし共同研究室は開室していて、室員さんも常駐してくれているおかげで、オンラインと対面の双方で、専攻と学生たちとのコンタクトはできるかぎり保たれているようです。とはいえ、そこで学生たちが歓談し、ゼミを行える日が一刻も早く戻ってくるよう願っています。